東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

Towards a New Perspective on Semantic Typology of Event Framing in Japanese and Chinese

著者	李 文超
号	11
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第140 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59215

LI WEN CHAO
李　文　超

学位の種類	博　士（国際文化）
学位記番号	国博　第１４０号
学位授与年月日	平成２４年　９月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期３年の課程） 国際文化交流論専攻
学位論文題目	Towards a New Perspective on Semantic Typology of Event Framing in Japanese and Chinese （日本語と中国語における事象フレームの意味論的タイポロジーに関する新視点に向けて）
論文審査委員	（主査） 教　授　小　野　尚　之　　准教授　ナロック　ハイコ 准教授　中　本　武　志 准教授　高　橋　大　厚

論文内容の要旨

本研究の目的には共時的なものと通時的なものの二つがある。第一の目的は日本語と中国語における空間移動事象と状態変化事象を表す語彙を比較対照分析することにより、両言語の形態的・統語的な相違を明らかにすることである。もう一つは、この二つの言語において、移動事象がどのように語彙化され現在の形式をとるに至ったのかという史的変遷をたどることである。

本論文の構成は以下の通りである。第一章では研究の背景と目的について述べたうえで、本研究の中心的概念である「衛星（satellite）」と「経路（path）」を定義する。第二章では移動事象の語彙化に関するいくつかのアプローチを取り上げ、本研究で用いる理論枠組みを紹介し、研究方法について述べる。第三章では現代日本語の空間移動と状態変化事象の分析を行う。ここでは単一動詞で表される事象と複雑述語で表される事象に分けて考察をすすめる。第四章では複合動詞と連続動詞構文（Serial Verb Construction, SVC）をそれぞれ中心に据え、現代中国語における事象の語彙化を論じる。第五章では、上代日本語と上古中国語における移動事象を表す語彙の史的変遷にどのような傾向が見出せるのかを明らかにする。第六章ではこれまでの分析結果に基

づいて結論を述べる。以下に論文の概要を述べる。

第一章では移動事象の研究史をまとめた。はじめに、移動事象の語彙化に関する類型論的研究の出発点となっている Talmy (1991, 2000)を詳細に検討した。Talmy (1985) はまず移動に関わる要素を、(a) 図（Figure）：移動する物体、(b) 地（Ground）：図の移動が示される場所、(c) 移動（motion）：動詞が表す移動（move）あるいは存在（be located）、(d) 経路（path）：図が地に対して辿る移動経路、と定義する。Talmy によると、ゲルマン諸語・スラブ諸語・フィン・ウゴル諸語等では、基本的に経路情報が動詞の周辺要素（接置詞、接尾辞）で表される。このような言語を「衛星枠付け言語（satellite-framed languages）」と呼ぶ。一方、ロマンス諸語・日本語・バスク語では、基本的に経路情報が主動詞で表され、これらの言語は「動詞枠付け言語（verb-framed languages）」と呼ばれる。この二分説は心理言語学や言語習得また翻訳に大いに影響を与えた。一方では、批判の声も少なくない。世界の言語における移動事象をどう捉えるかについては、語彙意味論の観点からから形式のまとまりを問題にする見方と、構文のまとまりを重視する見方がある。さらに近年、語用論的な側面を重視する研究が現れた。これらのうち、Slobin (1996, 2004, 2006) の一連の論考が注目を集めている。Slobin (2006) は，移動事象の様態事象に貢献する要素は「衛星フレーム言語」と「動詞フレーム言語」以外にも存在することを指摘し、ロマンス語のように移動と経路が融合しうるものを「均等フレーム言語（equipollent-framed languages）」に分類した。Slobin によるこの指摘は Talmy の二分法に注意が向けられてきた移動表現の類型論において重大な進展と言え、特に生産的な複合動詞と連結動詞構造に関する様々な問題に理論的解決を与える可能性がある。しかし、このような連結動詞構文に基づく仮説にはいくつかの問題がある。たとえば「均等フレーム」においては様態と経路が同等の地位を持つ構成素により表されるはずであるが、構成素が同等の地位をもつとはどういうことであるのか、必ずしも明確ではない。

第二章では理論枠組みと研究方法を紹介した。本研究ではフレーム意味論の枠組みを用いて、「移動と結果経路がどのような形で表現されるか」という課題を主たる考察対象とする。このフレーム意味論というアプローチは Fillmore & Atkins (1994) や Talmy (2000) が提案した Eevent Framing Model と次の点で異なる。

まず、言語の語彙化パターンを二分または三分せず、その言語の移動と状態変化に関するすべての語彙的・形態的・統語的項目を統括し、分析しようとする。さらに、「衛星」という概念を広げ、動詞語根と姉妹関係を持つ要素のほか、動詞に接合している接置詞（adposition）をも含む。なお、本研究は Kennedy and Levin(2008) や Beavers (2010) によって提案されているスケール構造（scalar structure）を導入して、形容詞述語、移動動詞、後置詞のスケール構造を分析し、それぞれ移動と状態変化事象の語彙化特性を明らかにする。

なお、上代日本語の用例採集にあたっては、『日本書紀歌謡』『古事記』『万葉集』『風土記歌謡』『仏足石歌』を、上古中国語の用例採集には『论语』『诗经』『孟子』『荀子』『韩非子』『战国策』『史记』『孔雀东南飞』を用いた。

第三章では、日本語における移動と状態変化事象の語彙化について、経路動詞、様態動詞、後置詞、開放／閉鎖スケール形容詞述語、複雑述語、擬態語を中心に考察を行った。その結果、日

本語は主に形態統語論的操作により事象を語彙化することが明らかになった。日本語では様態動詞は少ないが、移動動詞は多い。様態を表すためには、複合動詞（「すべり落ちる」）、動詞テ形＋動詞（「走っていく」）、擬態語＋動詞（「ぶらぶら歩く」）、従属節＋動詞（「転びながら落ちる」）が使われる。まとめると表１になる。

表 1. 現代日本語における語彙項目及び移動・変化表現の構成

(a) XP＋V	**構成方法**
後置詞＋経路動詞	V_{path}（「駅に行く」）
後置詞＋様態動詞	$PP_{path}\ V_{manner}$（「駅まで歩く」）
形容詞（開放／閉鎖スケール）	$AP\ V_{path}$, $AP_{path}\ V_{manner}$（「長く伸ばす」）
(b) 複雑述語	
複合動詞	$V_{manner}\ V_{path}$; $M_{manner}\ V_{path}$
動詞テ形＋動詞	$PART_{manner}\ V_{path}$
複文構造	$V_{manner}\ V_{path}$

では、単一動詞＋着点・経路 XP で表される移動事象から述べる。経路動詞は着点を表す後置詞「に」「へ」などをとる。様態動詞（「歩く」、「走る」など）は「に」のような場所を表す後置詞は選択しないが、経路全体あるいは境界点を表す後置詞「まで」と共起できる。なお、内在的な方向付けを持つ「上がる」「落ちる」などの動詞は、着点を表す後置詞「に」「へ」と共に、経路の境界を表す「まで」をとることもできる。

こういった相違はさらに「地」となる NP の選択に繋がる。Nikitina's (2008: 186) によれば、Ground NP は container grounds と area grounds の二種類に分けることができるが、様態動詞は場所の「を」格である areaGround NP をとる（「通りを歩く」）ことが可能で、経路動詞は container Ground NP と共起する（「霧の中に入る」）場合が多い。また、「から」「まで」のような境界標識を伴う移動表現は「衛星フレーム」となる。

次に、状態変化事象について述べる。日本語の状態変化事象においては、形容詞述語には有界性制約がない。すなわち、「長い」のように終点のない「開放スケール」形容詞と、「まっすぐな」のような終点のある「閉鎖スケール」形容詞のどちらも許される。さらに形容詞の意味や分布の差異により、状態変化事象を表す語彙の振る舞いが異なる。「ゴムを長く伸ばした」においては、「長い」は開放スケール形容詞述語であり、動詞「伸ばす」は「ゴムが長くなる」という変化するスケールを表現している。言い換えれば、状態変化経路を表すのが動詞である。このように「開放スケール形容詞」によって表される状態変化事象は「動詞フレーム」型を示す。一方、「ひもをまっすぐに伸ばした」においては、「まっすぐ」は「閉鎖スケール」形容詞であり、結果述語に内在化されたスケールは終点を持つ。したがって、 結果経路が動詞ではなく、「まっすぐに」によって表されている。それゆえ、「衛星フレーム」型ということになる。次に、「まで」が担う状態

変化事象を見てみよう。「に」が移動事象の着点と状態変化事象の結果のいずれをも表しうるのに対して、「まで」は単独では結果を表示することができない（「壁を真っ白｛*まで／に｝塗った」）。「まで」句で結果を表すには、(a) 軽動詞「になる」を付け加える（「壁を真っ白になるまで塗った」）、あるいは (b)「変化性（disposition to change）」という文法的条件を満たす、という二つの方法がある。「変化性」とは動詞の意味が当該の結果状態に対象が至るという変化を含意することである（「直角まで金属棒を曲げた」）。軽動詞「になる」を用いる場合、「壁を真っ白になるまで塗った」においては、軽動詞付きの「になるまで」によって表される結果経路が動詞の外に現れている。そして、「変化性」という文法的条件を満たす場合においても、「直角まで金属棒を曲げた」のように、結果経路が動詞の外に現れる。いずれにせよ、「まで」が担う状態変化事象は「衛星フレーム」型の振る舞いを示す。

最後に、擬態語について触れておきたい。日本語には擬態語が豊富に存在し、移動様態が擬態語によって表されることが多いが、「くたくた」「ふらふら」などのような擬態語は様態動詞より経路動詞と共起する傾向にある。

ここまで単一動詞＋着点・経路 XP によって表される移動と状態変化事象について論じてきたが、次は複雑述語によって表される事象を見ていきたい。

まず複合動詞であるが、日本語複合動詞の研究史を辿ると、構成要素の項構造や結合性の面のまとまりを問題にする見方と、語の意味的構造によって捉える研究に分けられる。たとえば寺村 (1969) では、構成要素の意味や自立性に基づき複合動詞が四つに分類されており、その後の現代語複合動詞研究に大きな影響を与えた。また影山 (1993, 1996) の項構造による「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の二分類も画期的なものであった。松本 (1998) と由本 (1996) の「主語一致の制約」（二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者が同一物を指さなければならない）を立てる見方も興味深い。本研究はそれぞれの分類法を比較検討した上で、由本の分類法（a. 並列関係、b. 付帯状況、c. 手段、d. 因果関係、e. 補文関係）に従うことにした。

移動表現を表す複合動詞には、並列関係 V-V（「走り回る」）、手段 V-V（「突き落とす」）、因果 V-V（「おぼれ死ぬ」）、付帯状況 V-V（「這い寄る」）、補語 V-V（「見逃す」）の五種類がある。並列関係 V-V では、二つの構成素 V1 と V2 がそれぞれ担う事象が同じく「状態変化経路」または「位置変化経路」を表している。したがって、「均等フレーム化」の語彙化パターンを示しているということができる。手段 V-V では、語彙的複合動詞において項構造および上位事象と下位事象の経路には以下のようなパターンがある。いずれも前項が手段を描写し、移動または結果経路の表示は後項の主動詞が担う。

a. 「他動詞＋他動詞」:「動作＋状態変化経路」（「殴り殺す」）、「動作＋位置変化経路」（「打ち上げる」）
b. 「他動詞＋非対格動詞」:「動作＋位置変化経路」（「押し入る」）
c. 「非対格動詞+非対格動詞」:「動作＋位置変化経路」「（起き上がる）」

因果 V-V における項構造及び上位事象と下位事象の経路のパターンは以下のように示される。

いずれも前項が原因を表し、主要部である後項は位置／状態変化経路を表す。V1 は動作主的動詞でも非動作主的動詞でも構わない。V2 は着点を表す「閉鎖スケール」的形態素に担われる場合が多い。

a. 「非能格動詞＋非対格動詞」:「動作＋状態変化経路」(「歩き疲れる」)
b. 「非対格動詞＋非対格動詞」:「位置変化経路＋位置変化経路」(「転げ落ちる」)
c. 「非対格動詞＋非対格動詞」:「状態変化経路＋状態変化経路」(「焼け死ぬ」)
d. 「非対格動詞＋非対格動詞」:「状態変化経路＋位置変化経路」(「焼け落ちる」)

付帯状況 V-V に関しては、「非能格動詞＋非能格動詞」のパターンしかなく、「移動＋位置変化経路」という構成を持つ（「走り上る」「這いよる」)。前項は後項が担う動作の様態を描写し、移動の経路は後項の主動詞が担っている。補語 V-V においては、V1 が動作を、V2 は結果状態を表す。

手段、原因、様態、補語関係の VV は「動詞フレーム」型を示す。一方、統語 VV が担う出来事においては、経路を表す要素後項には動詞の弱化 (verb weakening) が見られ、動詞語根の外に現れる。したがって、「衛星フレーム」の振る舞いを示すといえる。

そのほかの複雑述語については、まず、「動詞テ形＋動詞」においては、経路が主動詞で表され、様態は主動詞に接合する分詞形態素によって表されることから、様態と経路は形態的にも統語的にも均等的ではないことが分かる。

さらに、複文構造が担う複雑述語構文に関しては、様態を表す構成素を前景化することによって、独立した語彙項目と見なす。それゆえ、経路と様態が均等なステータスを持つと考えられる。

第四章では、現代中国語における移動と状態変化事象に着目し、中国語には、統語論と語彙意味論のインターフェイスレベルで移動と状態変化事象を語彙化することを明らかにした。すなわち、経路は主に方向補語、複合動詞、連続動詞構文（SVC）という三つのいずれかによって表現されるのである。方向補語は上古語の移動動詞が文法化されて生じたものである。例を(1)にまとめた。

(4) a. 開放スケール変化構成素：上 *shàng*「上がる」；起 *qǐ*「起きる」；下 *xià*「下がる」；回 *huí*「帰る」
b. 閉鎖スケール変化構成素：进 *jìn*「入る」；出 *chū*「出る」；过 *guò*「通る」；到 *dào*「着く」；来 *lái*「来る」；去 *qù*「行く」

上に挙げた語彙は方向補語として様態動詞と共起できるが、単独で移動を表す場合も多い。むしろ、様態動詞なしの表現のほうが自然のように見える。上古語の移動動詞がそれぞれ文法化される度合いが異なるゆえに、方向補語の特性が異なると言えよう。ごく一部の動詞は完全に文法化され、方向補語になるが、多くの移動動詞は目的語を取ることが可能であり、動詞としての性質が残っている。目的語を取る場合には次の二つのパターンがある。

(2)　a. 到日本 *dào rìběn*「日本に着く」

　　b. 回日本 *huí rìběn*「日本に戻る」

このような語彙的振る舞いはまさに「動詞フレーム」型といえよう。

次に、複雑述語による移動と状態変化事象に見てみよう。先行研究を踏まえ、意味構成と他動性により、中国語の複合動詞を「並列構造」型、「修飾語＋述語」型、「述語＋結果補語」型の三つに分類し、複合動詞によって表される移動と状態変化事象の語彙化を考察した。

まず「並列構造」型の複合動詞は、前項と後項は同じ意味と品詞特性を用い、前項動詞による出来事と後項動詞による出来事は同じ、もしくは類似するカテゴリーに属している。また音韻論的には、このタイプの複合動詞は常に二音節語として現れるという特徴がある。このように、前項動詞と後項動詞は均等の地位を示すことから、「並列構造」の複合動詞が担う移動と状態変化事象は「均等フレーム」型の振る舞いをすると言えるだろう。

次に、後項が主動詞であり、前項が修飾語である「修飾語＋述語」型の複合動詞では、全体のカテゴリーは後項動詞によって決まる。すなわち、V2 が自動詞である場合、複合動詞は自動性を持ち、主語は V2 がとる。V2 が他動詞である場合、複合動詞は他動性を持つ。さらに、前項述語が担う前項事象は後項事象に対して修飾、説明、制約などの役割を果たす。このことから、「修飾語＋述語」型 VV で表される出来事は「動詞フレーム」型の振る舞いを見せるということになる。

最後に「述語＋結果補語」型 VV は、他動詞、非対格動詞、能格動詞の後ろに結果を表す補語を付け加える操作により生じたものであり、最も生産性の高いタイプである。また結合の際に、範疇選択や意味選択の制限が非常に強いという特徴がある。後項述語は時制やアスペクトを様々な表現が現れうる。一般に、後項 V2 は「終点、時間量、距離、動作の量、状態、結果」等の「限界点」を表す「補語」の機能を持つ。従って、V2 を結果性の「衛星」と捉えれば、「述語＋結果補語型」複合動詞は「衛星フレーム」型であると考えられる。

次に、SVC について述べる。中国語の SVC は下のような多重動詞句構造を持つ。

(3)　a.　NP_1　[$_{VP}$　V_1　NP_2　[$_{VP}$　V_2]]

　　他 Tā　送了 sòng le　一箱 yī xiāng　苹果 píng-guǒ　来 lái.

　　「彼はリンゴを一箱送った」

　　b.　NP_1 [$_{VP}$　[$_{VP}$　V_1　NP_2] [$_{VP}$　V_2　NP_3]]

　　他 Tā　拿 ná　钥匙 yàoshi　开了 kāi le　门 mén.

　　「彼は鍵でドアを開けた」

移動・状態変化の SVC を形成する際には、方向補語の組み合わせは恣意ではなく、「非能格 V＋開放スケール変化構成素＋閉鎖スケール変化構成素」または「他動詞 V＋閉鎖スケール変化構

成素＋閉鎖スケール変化構成素」というパターンに限られている。すなわち、閉鎖スケール変化構成素が完全に文法化されると、開放スケール変化構成素よりステータスが低くなる。以上から、SVC が担う移動表現は「均等フレーム」型ではなく「衛星フレーム」型である。

第五章では、上代日本語と上古中国語の移動表現が文献資料において、どのような語彙化パターンで見出されるのかを考察した。『日本書紀歌謡』『古事記』『万葉集』『風土記歌謡』『仏足石歌』を分析した結果、上代日本語においては、「衛星フレーム」、「動詞フレーム」、「均等フレーム」の語彙化パターンが同時に存在しており、移動経路は動詞語幹、接頭辞、方向補語、境界標識、助動詞、不変化詞、複合動詞、動詞テ形＋動詞の複合語、SVC という九つの形式によって表されている。表 2 は語彙項目別に移動表現の構成方法を示している。

表 2. 上代日本語における語彙項目及び移動表現の構成

語彙項目	構成方法	出現率
動詞語根	V_{path}	60.1%
不変化辞	$PART_{path}\ V_{manner}$	3.3%
接頭辞	$PREF_{path}\ V_{manner}$	2.6%
助動詞	$AUX\ V_{path}$	0.37%
境界標識	$BM_{path}\ V_{manner}$	1.5%
方向補語	$V_{manner}\ DP_{path}$	9.9%
複合動詞	$V_{manner} + V_{path}$	20.5%
テ形動詞複合語	$V_{path} +_{participle} V_{manner}$	1.1%
SVC	$V_{manner}\ V_{path}$	1.8%

表 2 に示したように、上代日本語では動詞語幹で表される表現が 60.1%を占め、「動詞フレーム」型が最も多い。次は 20.5%を占める複合動詞による移動表現である。『日本書紀歌謡』『古事記』『万葉集』に目を向けると、接頭辞と助動詞が表す「衛星フレーム」型移動表現は頻度が低く、パターンも限られていた。次に、方向補語では一部の経路動詞に付くことが多い。また不変化辞によって表される移動表現には [GroundNP PART V] と [V PART] の二つのパターンがほぼ同じ頻度で現れる。

次に、複雑述語によって表される事象について見ていこう。「万葉集」においては、SVC とテ形動詞複合を使用されているということが目に付く。さらにに、上古語から中古語にいたるまで複合動詞の結びつきは緩やかで、それぞれの構成要素の独立性は高く、複数の動詞が形態的に繋がるように見えない。上古語の複合動詞は連結の動詞の意味を結び付けることによって形成されたものではないかと考えられる。本研究は構成素の統語と意味関係により、上古日本語の複合動

詞を以下(4) - (7) のように四種類に分けた。

(4) **並列 VV**

行き廻る（『仏足石歌』14）、消失す（『万葉集』9.1740）

(5) **修飾 VV**

a. V1 修飾 V2：遊び歩く（『万葉集』8.1629）

b. V2 修飾 V1：行き暮らす（『万葉集』1.79）

(6) **補文 VV**

吹き乱る（『万葉集』10.1856）

(7) **継続 VV**

立ちい行く（『万葉集』2.213）

ほかに、様態が「衛星」と見なされる副詞句で表現される例も見られた。以上の結果から上古日本語においては、語彙化の選択肢が豊富に存在していることが分かる。

次に中国語において移動と状態変化事象の語彙化がどのような変遷を遂げ、現在の形となったのかについて、考察していく。上代日本語において複合動詞が頻繁に使用されていたのに対して、上古中国語では単音節語で表す移動表現が多く、経路が (a) 動詞 (b) 動詞前辞 (preverb) (c) 挿入名詞 (incorporated noun) (d)不変化詞 (e) 補語という五つの語彙項目によって表されていることが確認できた。以下、語彙項目別に移動表現の構成方法を示す。

表 3. 古代中国語における語彙項目及び移動表現の構成

語彙項目	構成方法
動詞語根	V_{path}
包入名詞	$NP_{path}\ V_{manner}$
動詞前辞	$PREVV_{manner}$
複合動詞	$V_{manner}\ V_{path}$
補語	$V_{manner}\ DP_{path}$

さてここで注目されるのは、上古語の移動動詞が漢時代末に文法化されつつあった点である。包入名詞と動詞前辞が次第に衰退し、不変化詞のみが残ったのである。経路動詞が徐々に文法化され、補語になるという史的語彙変化に伴い、語彙化は一方向性の変化を遂げる。

Stage 1: 戦国時代（551-479 BC）から秦時代（221 BC）まで、中国語は単音節言語であるため、移動表現は単一動詞によって表される。語彙化パターンは「動詞フレーム」型である。

Stage 2: 西漢（207 BC-25 AD）の時代に動詞の文法化が発生し始まった。移動動詞が徐々に方向

補語に変化していき、「衛星」として振る舞うようになる。しかし、漢時代後期に至るまでは単一動詞で経路を表すことが最も多かった。
Stage 3: 漢時代後期 (25-220 AD) 以降、二音節と複合語が徐々に現れ語彙化パターンが「均等フレーム」型へ変化したものと推定される。

図 1. 古代中国語における語彙変化と伴う語彙化パターンの発展

時代	語彙	語彙化パターン
戦国時代 (551–479 BC)–秦 (221 BC)	単音節	動詞フレーム
西漢 (207 BC–25 AD)	文法化発生、方向補語	衛星フレーム
東漢 (202 BC)–現在	二音節、連結動詞構文	均等フレーム

ここまで明らかにしたことをまとめると次のようになる。

表 4. 古代日本語と中国語における経路を表す語彙項目及び語彙化パターン

語彙項目	上古中国語	上代日本語
単一動詞		
動詞語根	動詞フレーム	動詞フレーム
不変化辞	Ø	衛星フレーム
接頭辞	Ø	衛星フレーム
助動詞	Ø	衛星フレーム
方向補語	衛星フレーム	衛星フレーム
境界標識	Ø	衛星フレーム
動詞前辞	動詞フレーム	Ø
名詞抱合	衛星フレーム	Ø
複雑述語		
複合動詞	衛星フレーム, 均等フレーム	衛星フレーム, 動詞フレーム, 均等フレーム
テ形複合詞	Ø	均等フレーム
SVC	Ø	均等フレーム

第六章では第三章、第四章、第五章において明らかにした結果をまとめた。共時的視点と通時的な視点から、経路を表すという役割を担うすべての語彙項目を見た結果、現代日本語における事象の語彙化は主に形態統語論的操作によるのに対して、現代中国語では統語論と語彙意味論のインターフェイスレベルでで き事を語彙化することを明らかにすることができた。また上代日本

語と上古中国語の事象も形態統語的に説明することができた。

本研究ではさらに、「境界通過(boundary crossing)」と「非境界通過(non-boundary crossing)」という概念を手がかりに、両言語の相違を浮き彫りにすることを試みた。日本語においては、非境界通過の移動表現を表す際に、いくつかの Ground NP が一つの様態動詞に抱合される傾向がある。一方、境界通過の場合は、Ground NP ごとに経路動詞を取り、様態動詞を省く傾向が見られる。中国語においては、非境界通過の移動表現を表す際に、いくつかの Ground NP が一つの様態動詞に抱合する方法と、Ground NP ごとに様態動詞と方向補語を取るという二つの方法がある。この相違はさらに、日本語は連続経路を許さないが、中国語は連続経路を許すという相違に繋がる。その要因は移動経路を語彙化する手段が異なることにある。「衛星フレーム」型言語では、経路が動詞の周辺要素（接置詞、接尾辞）で表される場合が多いため、一つの節の中で連続的経路を表すことができる。一方、「動詞フレーム」型を主な語彙化パターンとする言語では、経路が節の主動詞で表されるため、複数の経路を一つの動詞に抱合することが不可能であるため、統語的操作であるテ形複合語、または従属節を用いて複数の経路を表現することになる。

以上、共時的視点と通時的視点から、語彙的・形態的・統語的リソースを分析した。示差的特徴としての移動と結果事象の語彙化操作は、これまでの先行研究で言われてきた言語間の類型的差異に起因するのではなく、多様な語彙項目の選択、または組み合わせの方法によるものであると結論付けられる。この結果は Beaver et al (2010) の立場と一致する。

また、他の言語の類型論的分析だけではなく、今回扱うことのできなかった「山が南北に走っている」のような主観的移動表現（fictive motion）や、使役移動表現（caused motion）にも応用可能であろう。

論文審査の結果の要旨

本研究は、事象のフレーム化における言語間の類型的相違を日本語と中国語を対象に共時的な観点と通時的な観点から考察したものである。事象のフレーム化とは、物の空間移動や状態の変化などの現実事象が言語で表現される方法のことであるが、フレーム化に関して世界の言語は大きく二つのタイプ、すわなち動詞フレーム言語とサテライト・フレーム言語に分かれるとする仮説が提示されている。この仮説によると、日本語は動詞フレーム言語、中国語はサテライト・フレーム言語というようにそれぞれ別の類型に属すると考えられている。本研究は、この仮説に基づいて現代日本語のフレーム化のしくみと現代中国語のフレーム化のしくみを詳細に分析して検証した。さらに、上代日本語と古代中国語のデータに基づいて通時的な分析も行った。これによって、それぞれの言語において、移動事象がどのように語彙化され現在の形式をとるに至ったのかという史的変遷が実証的な議論によって明らかになった。本研究は、両言語の差異が、先行研究で主張されているような類型的な差異に起因するのではなく、多様な形態的ないし統語的言語資源の選択という観点から説明されるべきものであるという結論に至った。

論文審査委員会は、本論文について特に次の点を高く評価した。まず第一に、移動事象と状態変化事象のフレーム化をめぐって、非常に広範囲な言語現象を丁寧に拾い上げて分析していることである。こ

れによって日本語および中国語のフレーム化現象がかなり包括的に明らかにされた。移動事象と状態変化事象の言語表現について、類型論の観点から両言語をこれほど詳細に比較した研究はきわめて少ないので、記述的な情報としても学術的な価値のある研究となった。次に、本研究の独創的な点として、古代語のデータによって、両言語のフレーム化の語彙的・形態的特性が変化したことを示したことがあげられる。フレーム化の問題について通時的な観点からアプローチした研究はこれまでほとんど行われていないので、本研究はこの問題に新たな知見を加えたものとして評価できる。論文審査会では、本研究で用いられているいくつかの理論的概念についてやや説明不足が見られる点が指摘された。その点については、最終試験における質疑応答において筆者本人から充分明らかにされたものと認めた。

以上の審査経過を踏まえ、審査委員会は、本学位論文提出者が自立的に研究活動を行うに足る研究能力と学識を備えているものと判断し、本論文を博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。